



技桑抄集
三十

伊地知文庫
文庫20
360
35



文庫 20
360
35

扶桑拾葉集卷第三

目錄

娘といたる辭

藤原幸家

肥後少將の悼辭

藤原為景

惺窩文集序

同

於長嘯亭催花宴和歌序

同

奉納菅廟詩歌序

同

報源光圀詩歌序

同

又

同

九月十三夜和歌序

日光山法善八講記

仙洞御色紙記

八瀬詞

暖味遊流記

成元餞別記

園東海道記

前乃相公以了り多和歌序

友とよあゝ和歌序

同

同

同

同

同

同

源通村

同

同

宇治無量壽寺記

同

嘆息まの影をばはるかに思ひ
よれし心はよれぬはら

あめふりよきより言昔法下力もまじりて
このほくいかのほきもわらわら半か
何きもふりよきより言昔法下力もまじりて
集とつよこのほきもわらわら半か
りよめ友とらぬとの葉又かあはに詩よあはに
筆のよけいよまじりて
人ぞくねるよあはに
袂とらぬより免簿とよまはて見よをれよ
今もあはによて母教よんはるよ

まじり仲尼の相のよきよ
いよに控りて廊廟の材とがよ

高はたよかよ渡りよよよ
はるか入あはよ海よよよ
まはよよよ
あはよよよ
あはよよよ

春閑別恨生
月蝕燕公癖
遺言憂國事
花落夢魂驚
星流諸葛營
至直感精誠

四の巻に於ては、
うづ階のうらも火もあつた
ゆらゆらとあつた
林乃えうられや
のゆきもあつた
とらふもあつた
書と漢詩と
うづらりぬ薬と
年月と送る

かすの塩ゆき
うづらりぬ薬と
年月と送る
ゆらゆらとあつた
林乃えうられや
のゆきもあつた
とらふもあつた
書と漢詩と
うづらりぬ薬と
年月と送る

又

隔とて一日よりあはれゆく海と海
ふらそのうらたけの疆に

ゆまらきとて待りせとて過る道

月日そとけの牙はかたしとて

講武有餘力

學文加琢磨

書開千里面

衣帶一圍和

逐氷交初淡

禦寒情更多

何時傾皂蓋

品藻大倭歌

又

同

長月のこの初唐のつわもの夕に玉きとあ

まんとあはれよ。あやまたん氷の源羽林のねと

せととさうり地。らるる海に夏末の海とあ

ほとあはれよ。何の鳥かまの海に

あはれよ。あはれよ。あはれよ。あはれよ。あはれよ。

らま。五月のひとあはれよ。彼水鳥の海とあ

あはれよ。池の西に。あはれよ。あはれよ。あはれよ。

のま。あはれよ。あはれよ。あはれよ。あはれよ。

あはれよ。中流のあはれよ。養鴨のあはれよ。あはれよ。

あはれよ。あはれよ。あはれよ。あはれよ。あはれよ。

あはれよ。あはれよ。あはれよ。あはれよ。あはれよ。

夢望水亭追薛字
自今羅奈音書少
一別奈胡萬里身
清談憶昔酒行頻

又

亭下猴置郵傳號令
恩波流入小泉水
東閩千里往來頻
能潤筆乾官路身

又

唯患僑居無寸暇
人言未邑和歌德
飯未何厭寄書頻
徒愧虛名惹此身

又

五十餘篇珠萬顆
如君佳句不辭頻

世營未肯及酬咏
鞿線小才慙愧身

又

別來數月易裘葛
一器珍散遠方賜
春到初驚光景頻
忽和醇酒助吟身

又

あいなやとのま言の何りまはれ
あいなやとのま言の何りまはれ
故口の人もわしはるるの何りまはれ
池のぬかももふんぬかももふんぬか
とみら葉の秋の句らん庭の海
まうたを山やめらる時めらる

とるふとみへ早苗や今の色は
書くより藤も夜はまじり来し
夜はとまへていづれも清きや
そのゆゑも古はつづきと師子

九月十三夜和歌序

同

いよや長月のこころの月か人のあはれをいふも
あまの川流るるまとのみ世人もいづれも
西の上人の葉の上清きよきけて光るる海と
壬生几二位かみらの原よをせり川原志清の
その外のよも葉かきふもいづれも清き

うや夜原良益とて好しり我うとわたり
とれとむと事久しきもいづれも清き
今宵の月見んとて笑まき市の中か
よや遠くぬ蘭若かりていづれも清き
んとむと事久しきもいづれも清き
法師の言ふもいづれも清き
かれと雲霧もいづれも清き
いづれも清き
あまの川流るるまとのみ世人もいづれも
西の上人の葉の上清きよきけて光るる海と
壬生几二位かみらの原よをせり川原志清の
その外のよも葉かきふもいづれも清き

西宮の御心付の秋の夕の月
木の石の月を人かからせ

と有きるも養ひえ女

待りては月を人の心からせ

と有りては月を人の心からせ

と有りては月を人の心からせ
西宮の御心付の秋の夕の月
木の石の月を人かからせ
と有きるも養ひえ女
待りては月を人の心からせ
と有りては月を人の心からせ
西宮の御心付の秋の夕の月
木の石の月を人かからせ
と有きるも養ひえ女
待りては月を人の心からせ
と有りては月を人の心からせ

西宮の御心付の秋の夕の月
木の石の月を人かからせ
と有きるも養ひえ女
待りては月を人の心からせ
と有りては月を人の心からせ
西宮の御心付の秋の夕の月
木の石の月を人かからせ
と有きるも養ひえ女
待りては月を人の心からせ
と有りては月を人の心からせ

西宮の御心付の秋の夕の月
木の石の月を人かからせ
と有きるも養ひえ女
待りては月を人の心からせ
と有りては月を人の心からせ
西宮の御心付の秋の夕の月
木の石の月を人かからせ
と有きるも養ひえ女
待りては月を人の心からせ
と有りては月を人の心からせ

冷光澄徹休叢底

宿蝶尚依籬菊枝

寄月露

清光澄徹休叢底
宿蝶尚依籬菊枝
月影如蟾玉
清光澄徹休叢底
宿蝶尚依籬菊枝

寄月海

月影如蟾玉
清光澄徹休叢底
宿蝶尚依籬菊枝
月影如蟾玉
清光澄徹休叢底
宿蝶尚依籬菊枝

老奴とて狂也笑ふ心行末は

月影如蟾玉

この雅舎も通復期危うし
禁裏の沙舎も有り
遺穢をば
獨のうら
中將の許より

雲の上の月

心ゆく

也

もとはぬ神にらむを涼一か

小野

山の炭の海らりしをいさるし葉はみ車。山田の早苗や
とまぬ一室の卯花雪の籬に由入て。まこもり
きんしむのあけり。たの細たゆみ。みら。うらぬ卯花
とらぬあしと思ひやう。あつらゆきこのみで

小野山や山田ゆみわけ卯花の

雪ゆみ。みらし。あつらゆきこのみか

とらぬあしと思ひやう。あつらゆきこのみで

岩塚遊覧記

同

五月十八日元日。朝も晴れ。たかみ。和重訪
来りぬ。威元。みら。あつらゆきこのみで
か。らぬあしと思ひやう。あつらゆきこのみで
い。そのあしと思ひやう。あつらゆきこのみで
山。猿。みら。あつらゆきこのみで
よ。ぬ。名。の。浦。舟。き。あつらゆきこのみで
ら。ぬ。と。虚。空。藏。し。あつらゆきこのみで
こ。ま。も。も。毛。是。の。早。苗。や。あつらゆきこのみで
皆。人。希。有。の。思。ひ。あつらゆきこのみで
日。現。じ。も。お。忘。る。か。あつらゆきこのみで
と。し。あつらゆきこのみで

和重

教見くく氷の光りし時
とくくくくくくくくくく

秘書

ふもはか〜〜
氷の光り〜〜

おまじは〜〜
ませ〜〜
入ぬ〜〜
り〜〜
う〜〜

と〜〜
き〜〜
す〜〜
お〜〜

拾遺

お〜〜
今の別と〜〜

和重

別〜〜
人の命は〜〜

秘書

ほろろと人の心あつた夜の
らららとゆきとゆきと
あつらふと母よとふいと
の道りらとやとふいと

関東海道記

源通村

元和八年十二月五日・俄と初とまゝく東関下の世
よ・宗嗣法師送し

離別念の情苦艱 官梅不發待君還
高才正識類相聚 吟伴枝葉芽一山
出門のわらわさくさく自の顔とらうとわらわ

わらわのあつたまゝの福とれ
えりこむ日のあつたあつた
同く書きしは侍

かこまらるる美とらふ人も初め
いふかゝる道とせよと
古きられはるるは臨麻山と越とて驛洛珍敷夜過
山とては山とて

羊とてこの山とて海とて山
ら清法寺とて山とて山
空の山とて

花とて山とて山とて山とて

まがて今も此後のやうに
いふ一節の處と如きや律令
もその神乃がなると見ん
るゝと一おとくか一何ん
るや一かめ一おとく一白
志がふく一おま一安ん
う返らぬ一法行て
消えそ一おまの
ぬいぬおま一おま
ぬくもき一おまの
法のなるとしかる

うおの世は遠く一法性の
元子らも一ぬ月や

宇治興聖禪寺記

同

檜別宇治縣の興聖寶林禪寺は本朝書洞の初祖
道元師の草創として宗門を續せしむるは乃は
寺院破壊していま是かしくなりと永井信
と大江尚政胡臣らにけり志らるる一靈流勝
際周覽のほろよは寺の廢れも事となく
忽再興の志とくし不日の經營は
と志らるる小件が練若當其乃佛什物糸給夫せ

爰も或人告く。んく。彼師子自刻いさる所の釈迦
年尾尊有り。是と云。隨喜感悦して刻いさる字
く安重と師他の物像。今け時。いさる。はらさるに
言像出現せし事。精舎の無隆の性実の。こしし。
希代の撰録末世の不思議とて。とて。志々のみゆと
師の法語は真蹟のいちく。真聖宮森山門洛東は木村
の人なり。て寄附と。又先年新院初筆の發神海
の漢唐の天神。因母他院紀實之よ。ゆれとらじ
給うと。いさ。これら。の畫像繡佛のよ。い
り。後唐繡帛と裁して。衆と。法彩。施き。
誠子龍田姫の瑞の色。はら。織女のよ。とて。いさ。

めし。りや。め。さ。ゆ。か。り。い。れ。は。家。庭。の。秘。と。い。く
と。お。れ。く。觀。と。志。が。は。從。太。上。天。皇。の。宸。翰。寧。運。法
師。の。字。法。川。の。秀。歎。一。篇。と。い。く。是。と。わ。ら。め。く。實。徳。の
靈。と。た。か。の。唐。の。樂。天。の。白。氏。洛。中。集。と。善。山。寺。の。經。藏
堂。と。移。し。と。く。記。文。と。願。い。今。生。世。俗。文。字。乃。業。相。言。綺
語。の。過。と。と。て。博。し。と。將。來。世。の。讚。佛。衆。の。因。轉。法
輪。の。緣。と。い。ふ。ん。し。と。う。れ。ら。の。半。法。思。く。蓋。和。歌。の
源。實。相。真。如。の。妙。理。と。う。流。和。光。同。塵。の。應。觀。の
り。と。い。ふ。是。以。神。明。佛。陀。吾。國。の。習。俗。と。い。ふ。何。を
と。ん。た。と。い。ふ。事。れ。く。和。語。の。源。吟。貴。せ。ん。と。い。ふ。事。か。
中。日。は。お。て。重。徳。を。子。序。善。山。の。云。集。と。の。始。り。と。い。ふ。

達磨大師昌蒲川の詠は較(孝)二の事一祖意よと
うんや・まろ志うは禪風物ゆい振起し法林と
うーまよ流通しし世に絶りる存といふ可志の案
慶安二の年冬三月うん詠記少

杖索拾葉集卷第三十終

